

に之が均衡調和をはかるものなれども、人心本來活動的にして久しく  
 平板の状態に静止する能はず、を以て或ひは情的一端に高潮を  
 呈し、或ひは智的方面に傾く、この状態は一日の中一生の中皆その軌を  
 一にするものなるも、其人の本質によりて情的に久しく止まるあり而  
 して社會も亦た個人と同じく智識時代となり信仰時代となり、一昂一  
 下漸を追うて進歩發展す、雖も智的方面と情的方面との暗流は常に  
 社會の中に流通せることは古今を通じて歴史の證明する處なり。  
 『こゝに於てか常に三個の相反對せざる思想のあらはるゝを見る、本邦  
 現時の状態を察するに亦然るもの如し、即ち一方には常識より出  
 立して經驗に基き正確なる推論により眞理を認識せんとするあり、  
 他面には信仰(狹義の)に基き思辨によりて安住せんとするものあり、  
 予を以て見れば君はこの後者に屬する一人なるが如し、如何となれ

ば靈魂不滅佛の存在の如き概念を腦裡より除却する能はず、説明  
 の巧拙によりて信仰に増減する所なし、有爲轉變の原因とも見るべ  
 き習氣を斷滅せしむるは唯絶對不思議の力に投託せる金剛不壞な  
 る大信仰力なり、宗教家は信念の上に腰を据えて而る後に説明を試  
 みんと欲するなり、等の言は、信仰を基として而る後に説明に移らん  
 とするものなればなり。』

今の閣臣は動もすれば衰龍の袖にかくれ、宗教家は信仰の裡に坐して、  
 世の文化は如何にもあれ、我は我が信する所によりて、一切の行動運命  
 を佛の福音に投託す、心胸廓然、心廣く體胖かに、美妙の音は耳朶にさ  
 らやき、靈怪の客姿枕邊に現はるとなし、白眼他の世上の人を見る、君も  
 亦この信念の上に安住するものなりや、否やを知らずと雖も、已に一切  
 の思想行動が佛阿の存在靈魂不滅の信仰によりて支配せらるゝ迄に

成り居れるからは必ずや絶對不思議の力を觀じ、佛陀と融合徜徉せるものあらん、この強固なる信念に向つて誰か敢て力を抗せん、されども智と相待たざる信仰は動もすれば迷信に陥り易く、鱗の頭も信心からの誹りを免かれず。

『予は常に思ふ、現代科學者と哲學者、宗教者と常に思想の衝突するを免れざるものは、要するに信仰と智識との限界の不明なるが爲にして將來最も研究の要あるものは、この智と信との關係にあり、而して科學者は常識を基礎とし、その推論は經驗に基き、智の足らざる處は信仰の助けによりて證明説明をなし、以て宇宙を解釋し、哲學にはこれらの經驗を材料とし、抽象に抽象を重ね、思辨を積み、以て宇宙の奥底に到らんとす、其極動もすれば出立せし處を忘れて自ら己が影を驚くに至る、抽象の弊として、一寸の差遂に千里の誤りを來し、その

結論と常識とは相齟齬することあり、こゝに於てか衝突を來す。』  
宗教者は初めより信仰の上に立ち、先づ神明佛陀の力にすがり、以て其不思議を觀じ、宇宙の奥底に到達せんことを願ふ、反問す佛陀本來何ものが作りしか、吾人の心の力にあらすや、然るに心の如何を究めずして却つて之を實在となし、信仰を以て、唯一の頼みとなす、宇宙の眞相人間の本質、如此にして如何でかよく知ることを得ん、フオン、キルヒマンが曰へる如く、自らの心を以て心を研究するは必竟臆測を以て臆測を論ずるに均しとはいへ、先づ經驗に訴へて知り得る限りは之を智識に求め、其知る能はざる所は之を補ふに始めて信仰を以てすべきのみ、之をなすの道は先づ人間の本質を研究するにあり、物といひ心といひ、將た宇宙人生といふも皆人間の心ありてのことなれば、心の本質を明かにし、さて物質の本質を究め、以て漸次歩を進めざる可らず。

『宗教家は常にいふ、人智は到底宇宙の疑問を解決する力なしと、固より然り、試みに宇宙の原始についてネビュラ説によるも、その奥底に到れば雲霧の如き一團の單純なる物質より、如何にして精神の如き活動を生せしかは知る能はず、之を補ふに化學者の所謂(Vortex motion)を以てするも、未だ盡さざる所あり、心理學者の研究によるも、ウルリツチは腦髓の機能なくば精神作用は起らざるも、腦髓が心作用の唯一の原因なりとは俄かに斷言すべからずとなし、更に(Hind)を心の基礎とするも、これ已に抽象的のものに屬し、或ひは又生物學者の説によりて細胞の原形質(Protoplasm)を調ぶるも、未だ充分に説明せられざるものあるは事實なり、さらばとて、直に人間は無力なり、佛陀の力によりざれば解説する能はずとはいふ可らず、或は宇宙の奥底は其始めしかく精緻靈妙の構成には非ずして、人氣に相反する二性は始め

より有りしならん、これを利用して燈となし、は、これ人智の産物ならざる可らず』

かく述べ來れば、予は飽迄經驗主義なるが如くならんも、予は靈魂不滅を科學の上より否定せんとするものにもあらず、信仰を無視して冷靜なる理屈に安んずるものにもあらず、期する處は經驗によりて説明せらるゝ限りは科學智に求め、之を補ふに信仰を以てし、迷信に陥ることなく、理性のみに安んぜず、深厚にして温かき情を養ひ、以て健全なる信仰の上に立たんとするにあり、故に人の批評に耳を傾け、世の進化人文の發展に目を注ぎ、常に自己の心田を開拓し、進む處までは進まんとするが故に、信仰も亦大に變化せざるを得ず、所謂大悟徹底の期は棺に入るん時にあらんも知る可らず、長く君を煩はしたる罪は深く謝する所、予が靈魂もし靈あらば、君の枕邊に立つて謝辭を述ぶる時あるべし。

### 第十九章 釋尊の人格

釋尊の歴史上の偉人物なることは何人も否定するものはない、或は社會の改革者として、或は宗教の革命者として、或は深遠なる思索家として、或は真摯なる徳行家として、以上何づれの方面より觀るも、釋尊は稀世の大英傑に相違ない、然れども是れは唯た外面に耀發せし結果のみに着目したる皮相の見解に過ぎない、未だ深く釋尊の心靈界迄をも洞察したる切實なる觀察ではあるまい、

釋尊が以上の諸點に於て傑出せられたることは、釋尊の内證自得の結果なることを忘却してはならぬ、釋尊の心靈界其れ自身に於て既に稀世の偉人たる資格が備はりて居たのである、

人の技能は或程度迄は天性にも由るものなれども、大部分は修養の功

に由るものである、修養の功を積むこと深ければ其力は隨て強く、修養の功を積むこと淺ければ其力は隨て弱は、人間萬事修養が最も大切である、

然り而して釋尊は非常の苦心慘憺の結果大正覺を取られしことは歴史上明かなることである、釋尊は御幼少の頃より世界問題、人生問題に就て大疑團を起し、あらゆる工夫を凝らしたる後、自家の内心に向て、驚地に修養鍛錬するに若かすと決心し、浮世の尊貴を土芥に見做し、檀特山に隠れて勤苦すること多年、遂に廓然として大悟し玉ひしなり、抑も釋尊の修養とは如何なるものなりしか、

夫れ人間の意識は種々なる觀念の集合によりて出來て居る、其中には善の觀念もあり、惡の觀念もある、善の觀念が膨脹すれば、惡の觀念は形を潜め、惡の觀念が膨脹すれば、善の觀念は形を潜む、是を以て道德的修

養とは善の觀念をして充分に膨脹せしめ、惡の觀念をして恣まに跋扈するの餘地だになからしめ、終に之を退治し盡すことを以て理想となすものである。善の觀念のみが意識中に存在せしは、外部に表現する一言一行期せずして善にあらすと云ふことはない。是れ即ち大聖人の境界である。

宗教的觀念は善の觀念中の首である。道德的觀念は相待的なれとも宗教的觀念は絶待的である。絶待善に到達しなければ善の極致と申すことは出来ない。故に宗教的觀念を養成することは修養中の最も大切なことにして、人世に此れに過ぎた結構なことはない。是を成し終らば人間の能事終はれりと謂て宜い。釋尊の修養とは即ち宗教的觀念の養成に外ならないのである。而るに如何に善の觀念を養成して見ても、稍もすると惡念が増長し來て善念を妨げんと欲す。是に於て善念と惡念

との間に劇しき競争が起る。餘程意志を鞏固に持たねば善念は忽ちに負けて仕舞ふ。釋尊の勤苦とは此處である。肉體上の苦痛位は取るに足らない。惡魔の襲來とは惡念の襲來と云ふことを意味して居るのである。勤苦六年の結果、一切の忘念忘想を打破し盡して宗教的觀念即ち絶待的觀念を充分に發得せられたのである。二月八日東方の自らむ頭廓然大悟して無上正眞道を得られたのである。天地一切萬有は此時に當りて一時に釋尊の大心海に歸したのである。此時の愉快果して如何そや、

釋尊の偉人物たる資格は既に此の一事に存して居るので、其の他の事は皆鎖々たる枝葉のことである。釋尊の大救世主たるの資格は此點にあるので、釋尊も亦た此自覺があつたに相違ない。彼の表面に顯はれたる種々なる活動は斯かる自覺より發したる結果である。終りに一言致

し度きことあり、此の頃自稱豫言者と云ふものが澤山ある様であるが、彼等は如何なる自覺ありて斯かる公言を吐くに至りしか甚た怪訝に堪えざる次第である、彼等は山師にあらずんば精神病者である、何等の修養も経験もなくして、斯かる公言をなすとは不埒千萬である、釋尊の傳記に鑑みて篤と反省するがよい。

# 生 死 問 題 終

北 村 教 嚴

# 自 省 錄

▲廣く世間の人と交際する中に、性情互に融合して、彼我の間に些少の苦澁もなく、誠に氣樂なる間柄となるもあり、又た之に反して何となく牆壁が横はりて、心底を打ち解けて、愉快なる談話の出来ぬ人もある、なり、而るに初めの間は如何にも氣六つかしき人かなと思ひしも、絶えず來往する程に、いつとなく親しく成り行き、終りには秘密をも打ち明けて相談すると云ふ頼みある仲となることあり、又た初めの間は誠に面白き人かなと思ひしも、交はり行く間に飽氣を生じて自然に相遠さかる様に成るもあるなり、同じく人と交はる中にも、斯の如き區別の生

附 錄 自 省 錄

するは如何なる理由の存するにや。(第一則)

▲斯様な問題は人間生活の大事件なり、人世の秘密の潜伏する所なり、徒らに哲學者倫理學者の空論に左右せらるることなく、斯の如き問題を最も眞實に思惟することは、吾人が修養に鮮なからざる利益を興るものなり。(第二則)

▲物體は各空間の或る位置を有てり、甲は甲の位置を守りて乙を取り除けざる間は乙の位置に入ること能はず、乙は乙の位置を守りて甲を取り除けざる間は甲の位置に入ること能はず、各個特殊の位置を保ちて、互に涉入せざるは、固定體の特質なり、液體は固定體よりも固定質鮮き故へ、異種の液體を混交して一器の中に充たすこと容易なり、而れども尙微細に考察するに、甲の液體と乙の液體と一になりたるにはあらず、唯だ甲の液體の分子の間に乙の液體の分子の細かに入り込みたる

に過ぎざるなり、次に瓦斯體になりては最も混交し易き性質を有せり、瓦斯體には固着性最も鮮なき故へ、他を拒むことも亦た最も鮮なし、他を拒むことは最も鮮なき故へ、混交も亦た最も易きなり、去れば固定性の強きものは、他を拒むことも強し、他を拒むことも強き故へ、混交も亦た強し、之に反して固定性の鮮なきものは、他を拒むことも鮮なし、他を拒むこと鮮なければ、自他混交もなし、易しと知るべし。(第三則)

▲人と交際の圓滑に出来ぬと云ふは、要するに、自己の固定性の大なるに由るなり、換言すれば、我心の頑強なるに基くべし、我心頑強なる故へ人の心を容るることもなし、我心を撤すれば人の心は我が心の中に入り來り、我心は亦た人の心の中に入り行くへし、彼我が心互に涉入して間隔なきに至る時は、此に始めて心底より打ち解けたる愉快なる交際の生ずるなり、是れ即ち融通なり、相入なり。(第四則)

▲一體融通の出来ぬと云ふことは人間の苦痛の唯一の原因なるべし、人の苦樂と云ふことは融通と不融通との二つに歸するなり、融通が利ければ意志が自由になり、融通が利かざれば意志は不自由となる、人生の苦樂は畢竟此所に存す。(第五則)

▲曩きに日露戦争の起るや、元老の人々が頻りに節約主義を鼓吹せしため、國民舉て消極に傾き、一も二もなく退嬰を主となし、金融の逼迫を告げ、經濟界の大恐慌を來たし、其の被害容易に救ふべからざるに至れり、教育實業は緊縮せられ、多の勞働者は金儲けに窮し、誠に苦しき次第なりき。(第六則)

▲金錢の不融通より來る苦痛は斯の如くなるが、心の不融通より來る苦痛は、金錢の不融通に劣らぬ苦痛を生ずるなり、一家庭の中に於て夫と妻と心が融通せず、親と子の間に心の融通せず、兄弟姉妹の間に心が

融通せぬと云ふことありては、其の心の苦しき如何許りぞや、斯くては家族と云ふも名許りにて、其實は他人同様なり、朋友の間にも心の融通なき時は如何誠に趣味のなき表面のみの交際となるべし、此苦痛より生し來る不幸は大なるものにして、誤解猜忌嫉妬邪推疑念不平怨恨等の種々なる惡徳をかもすに至る、此等の惡徳の浸潤して深きに達する時は、容易に消解の出來ざるのみならず、愈益々増長して到底醫すべからざるに至る、其の苦痛の大なること凡そ比類なかるべし。(第七則)

▲去れば愉快なる人生を送らんと欲せば、金錢の融通を計ることの大切なるが、如くに心の融通を計ること、も大切なり、而して金錢の融通を計るは、經濟家實業家の責任にして、心の融通を計るは、宗教家の責任なり。(第八則)

▲心の融通とは心の打ち解くることなり、心の打ち解くるとは心の底



に停滯するところなく、少しも嫌悪の心をさしはさまざる也。些少たりとも嫌悪の心をさしはさまみ怨恨不平の情の停滯するときは、心の圓滿を缺き、自然に角立ち、此が爲めに他の心と我心との間に牆壁を生じて、互に要心して容易に氣を許さぬ様になるなり。(第九則)

▲人の此世に在るや、必ず其の爲すべき本分なかるべからず。此の本分を見附けし、精心誠意活動すべきなり。あらゆる苦痛は是より生じ、又たあらゆる幸福も是より生ず。苦痛を識ればこそ幸福も識らるゝなれ。初より苦痛のなきものには幸福も隨て無きなり。(第十則)

▲人間は何の處より生れ來りしか。又た何の爲めに生れたるか。といふことは随分六ヶ敷き問題なれども、是れは小數の學者の研究に委ね置きて善かるべし。未だ何等の學業も經驗も積まざる青年が、斯かる閑問題を提供して煩悶することは大なる誤謬なり。徒らに空想を選ぶする

のみにして、何等の裨益もなきなり。夫よりも更に緊急なる重大問題あり。——即ち吾人は何を爲すべきかと云ふこと之なり。(第十一則)

▲何れより生まれたるか。——知らず。——何の爲めに生まれたるか。——知らず。——知らざればとて處世上何等の不都合もなきなり。兎に角吾人が現在此世に生きて居ることは事實なり。此の事實を空くせざる所に人世の味あり。(第十二則)

▲此の事實を空ふせざる爲めには、何等かの業務を執りて活動せざるべからず。此の活動こそ人生をして意義あらしむるものなれ。——去れば吾人は何の爲めに生れたかと云ふことよりも、生まれれた以上は何を爲すべきかと云ふことが大切である。(第十三則)

▲空理想は閑人の腦裡に浮游する子子なり。水の流動する所には腐蝕生せず。業務に忙殺せらるゝ人には空想なし。空想なき人には煩悶な

し、煩悶は人生を危殆に陥らしむる大強敵なり。(第十四則)

▲西隣に曰く、馬を河邊に牽ゆるには一人にて足れり、之れに水飲ましむることは、十人にても能はずと、人の好まざることを強ゆるは實に至難なり、縁なき衆生は度し難いかな。(第十五則)

▲予嘗て冬日雪を踏て世田ヶ谷豪徳寺に故謙道を訪ふ、當年八十一才なりき、謙道は彦根の藩士なりしが、伊井大老の要撃せらるゝや、難髮して豪徳寺に隠れ、専ら亡君の墓所を守ることに三十有餘年、花鳥風月の遊にも交はらず、富貴利達をも羨まず、寺畔に小蘆を結び、朝夕酒掃讀經して、亡君の遺靈に事ふるを以て樂みとなす、余の至るを見て、喜び迎て、墓前に伏し、額の泥土に就くを意とせざるものゝ如し、余彼が精忠の篤きを見て、敬慕の念禁ずること能はざりき、嗚呼古の武士主君を想ふの切なること斯の如くなりしが、如今世道澆季、人情の薄きこと紙よりも

甚だし。(第十六則)

▲人の己れを愛せざるを恨む勿れ、己れ先づ彼を愛すべし、人の己れを敬せざるを惜る勿れ、己れ先づ彼を敬すべし、愛敬は己れより出づ、人より來るにはあらざるなり。(第十七則)

▲書齋の樂は筆紙に盡し難し、先づ箒にて塵埃を掃き出し、雑巾にて床机書棚を拭ひ、花を生け、香を焼き、静坐沈思少時にして、徐ろに經卷を繙く、胸宇爽然として、終日の煩悶を忘るゝに至る、予は道樂半分でなくては學問の趣味は解せられぬと思ふ。(第十八則)

▲人世に於ては骨と云ふ秘鑰あり、骨なるものは神秘的の力なり、口にも詞にも顯はすこと能はず、詩歌を誦するには詩歌の骨あり、音樂の骨あり、交際にも骨あり、投機にも骨あり、禪にも骨あり、官吏、學者、商人、藝人等各自に其の道の骨を捕へ得たるものは成功するなり、嗚呼骨なるか

な々々々。(第十九則)

▲但し左の事を記憶せよ、骨は容易に解せらるゝものにあらず、多年苦辛經營慘憺の功によりて發得せらるゝものなることを。(第二十則)

▲世を渡るには心の融通の必要なるは前に述べし通りなるが心に融通無碍のなき時は第一に人を信ずることは出来ぬ、人を信ずることが出来ねば、人も亦た我を信せぬ、誤解狐疑、邪推嫉妬、我慢等の惡徳は皆悉く此處より發する也、而かる時は、人間はコセツイタ小人物となり、心の悠暢和樂を飲き、免角人を容るゝことの出来ざる様になるべし、氣の知れぬ人とか、局量の狭まき人と申すは、此種の人を云ふなり。(第廿二則)

▲人と互に氣を知り合ひ、心情相通じて、停滯せぬ様になすには先づ己れの心を開いて、充分に人の心を迎るに在り、人の局量の大小性情の如何には頓着するの要なし、唯だ己れより心を開きて充分に人の意を迎

る時は、人も亦た其心を開くに至るべし、人の局量の大小性情の如何と云ふことにのみ着眼するは、未だ自己の精神修養の不足より生ずるなり、大人物とか大聖人とか云はるゝ人は、決して對手の如何に頓着せざるなり、自己の心中に凝滯する所なき故に、精神開豁にして能く人の心を容れ、又た自己の眞情を人の心に徹せしむ、人を信服せしむるの徳は此處に存せり、此徳を大自在力とも無碍力とも云ふべし。(第廿二則)

▲人を知らんと欲せば、先づ己れの心を開きて人に向くることの必要なること斯の如し、人と人との關係のみならず、人と如來との關係も亦た斯の如く也、吾人が如來を知ることの能はざるは、其心が如來に向かはざればなり、古人も云へる如く、心在らざれば見て見えず、聽て聽かず、食ふて其味を知らざるなり、如來は常に吾人に心に向け玉ふと雖ども、吾人は疑心深き故へ如來に心に向けず、是によりて如來を見ることを

得ざるなり、自力の心を捨てよと云ふは、自己の心を開いて充分に如來に向くことに外ならず、而かるるときは如來の心は充分に吾心に入り來るなり、是に至りて如來の心と衆生の心との間に融通を生ずるなり、吾心の開くこと大なる丈、如來の心の入り來ることも亦た大なり、如來の心には停滯物もなく、牆壁もなし、十方法界悉く如來の心中に在り、而して如來の心は又た十方法界に圓滿せり、十方法界と如來の心とは融通無碍なり、之を如來の自在力と云ふなり。(第廿三則)

▲大乘佛教と申すものを哲學的に觀察する時は、如何にも乾燥なる理論に似たれども、是れ學者の謬見なり、佛教は高尚玄妙の理論を弄ぶを以て本旨となすものにあらず、其妙理を實地に履行することを以て目的となせり、されば華嚴にて談ずる所の融通無碍の教理の如きも、精神修養の上に利用し來る時は、少なからざる趣味を存するなり、吾人が如

來の救に與かるにも、如來の心と吾人の心とを融通せしむること大切なり、吾人の心如來に向ひ居らば、如來の心は吾人の心を通じて現はれ玉ふこと疑ひなし。(第廿四則)

▲順境にのみ處する者は、順境の常あるを想ひて貧困の苦なることを識らず、奢侈放肆の心増長し、衣食の美を盡して尙且つ我が意を満たすに足らずとなす、偶々貧困に陥るに及で始めて曩日の非を悟る、乃ち謂らく、若し此の窮状を挽回するの時至らば、敢て曩日の非を復たびせざるべしと、而して幸にして順境の來復することあらば、忽ちにして貧困の苦を忘却して、識らずく曩日の非を繰返すに至る、眞に憐れむべしとなす、順境に處して逆境の苦を忘れざるものは眞に丈夫なり。(第廿五則)

▲惡事を成すの術を識らずして、惡事を成さざるものは凡人なり、惡事を成すの術を識りて、而して敢て成さざるものは丈夫なり。(第廿六則)

▲人多く我れの長を識りて彼れの長を識らず却て我れの短を隠して人の短を發かんと欲す是を以て慷慨悲憤罵詈咽痛の言を弄するものは必ずしも正直の士にあらず是れ多くは我の短を擁護するの策に出づ其の心術の陋劣なる誠に哀れむに堪へたり。(第廿七則)

▲自から泣かずんば人を泣しむるを得ず自から喜ばずんば人を喜ばしむるを得ず人世は我が情緒を反射するの明鏡なり。(第廿八則)

▲カント曰く激情は堤防を破壊する水の如く慾情は堤床を潜流する河の如しと眞に至言なり。(第廿九則)

▲又曰く激情は中風症の如く慾情は肺患の如しと一時に激發する力あるものは其の結果速かなりと雖も徐々として來るものは其の結果遠くして且つ深かし精神修養の效果は顯なるものゝ上にあらずして微なるものゝ上にあり。(第三十則)

▲手腕家と稱せらるゝ人は膽才共に備はれり之に反して手腕なき人は事に動せざるの膽もなく人を動かすの才も缺けり而れども觀るべき膽もなく觀るべき才もなきが如き人にして能く人を御するの道を得たるものあり是れ人に長たるの徳あればなり膽才を弄するの人は往々にして事敗れ易し徳を以て立つ人には失敗なし徳は膽才の上に在り。(第卅一則)

▲學者には學を以て人に誇らんとするの病あり富者には富を以て人に誇らんとするの病あり共に我が長處を御するの徳を缺けり慎むべき事なり。(第卅二則)

▲氣質の單純なる人は人を信すること早し而して人を識るの明を缺けり正直なる人の欺かれ易きは此の缺點あればなり一切の人は皆な我れと同じく正直なるものと誤解すればなり。(第卅三則)

▲女の美なるを觀て、美を美とすれば則ち足れり、花の美、月の美を觀て、美となすと選ぶ所なきなり、唯だ前者は後者よりも執念を増長せしめ易し、是れ人の道を誤まる所以なり。(第卅四則)

▲物には有用の用と云ふこと、無用の用と云ふことあり、有用の用とは是非とも日常の生活に無くてはならぬものにて、例へば金、銀、米、穀、家屋、衣服の如きものをいふ、無用の用とは、例へば芝居、公園、圖書、音樂の如きものなり、吾人は芝居を見なくとも、公園に行かなくとも、生命を維持すると云ふことには直接何等の影響もなき様なれども、間接の影響は仲々重大なるものなり、人が各自に其の好む所によりて精神を養ひ、銳氣を作り、身體を勵ますことが出来る、去すれば更に新たに活動を初めて有益なる業務に服従することが出来るのである。(第卅五則)

▲是を以て徳教に悖らざる以上は、各自に其の好む所を樂むと云ふこ

とが大切である、酒好きな人は酒を飲むべし、茶好きな人は茶を喫すべし、書畫、骨董、圍棋、謠曲、唱歌、音樂、相撲、芝居、何でも自分の面白しと感ずるものを樂むがよい、——唯だ注意すべきことは、自己の分限を超えぬ様になすべきなり。(第卅六則)

▲天地人生の間には、人間の性情に應ずる丈の娛樂は備はりて居る、又た新たに娛樂を造り出すべき餘裕は澤山に存して居る、而るに之れを樂むことを知らぬと云ふは、其人物に興味を解する丈の徳が備はりて居ないのである、如何なる種類の娛樂を問はず、趣味を解し得た人は、一段と光彩がありて奥ゆかしい様な氣がする、之れに反して名利に狂奔して何等の趣味も餘裕もなき人に出會は、誠に人物は卑く見ゆる、如何に其人が常識が發達して居ても、之れ丈では人に信服せらるゝことが六か敷い。(第卅七則)

▲此の點に至りては、理屈にて論定することが出来ぬ、何となれば、面白いと思はぬ人に、無理に面白いと思へど押し附けた所で、任様がないからである。若し面白いと思はそうと欲するならば、種々なる間接手段を盡して、之れに對する其人の趣味の自から啓發せらるゝ時機を待つべきである。(第卅八則)

▲煩悶や不平のみを並べて、ブツブツ云つて居る人は、娛樂によりて自己の性情を養ふの道を知らぬから起るのである。(第卅九則)

▲有用の用には、勿論相應の樂みが存して居るに相違なければ、却て無用の用の方が趣味が餘計に存して、頗る深遠なる所がある例へば、ミカエルアングロや、ラファエルや、米市や、吳道子杯の傑作を持たなくても、妻子を養い家計を立つることには不自由を來たすことあるまじ、去りながら、美術趣味の深き人は、斯かるものに接しなければ性情を養ふ

ことが出来ないのである。家財を盡し、妻子を餓渇に迫まらして置いて、斯の如きものにのみ耽るの、不道德の甚きものなれども、収入と支出とを省みて、分限相應の費澤をなすことは、人文發達の上に大切な効果がある。故に人間の娛樂には、健全なる道德的理想の伴ふことが肝要である。(第四十則)

▲有用の用のみを大切に思ふて無用の用の大切なることを解し得ない人は、共に語るに足らない。(第四十一則)

▲讀書三昧に入りたる後、身心の疲勞を感ずること大なり、斯かる時に偶然知人の來訪することあらば、其の愉快云ふべからず。(第四十二則)

▲遠ざかりて居た時には、非常に敬服して居た人なるが、近づきて見れば、左程にも思はれない人もあり、又た未だ接しない時には、小人と思ふて居た人にも、直接に交はれば、交はる程信服の出来る様になる人も

ある、前者の浮淺なるは後者の眞實なるに及ばざると遠し。(第三則)

▲子供と遊ぶ時には自分も子供の様な氣に成るべく、婦人と交はるには自分も婦人の様な氣になるべく、商人と話す時には自分も商人の様な氣になるべし、對機に應じて自己の氣の取り方を變せねばならぬ、然らざれば彼我の間が充分に疏通出来ぬ、是れは御追従でもなければ無節操でもない、人に愛情を注ぐの端緒である、之が自由に出来る人は大自在力を得たる人と云ふべし。(第四十四則)

▲人間世界には絶待的に争を無くする譯には行かぬ、如何に平和を愛するの人も人間に生を保つ中に、ドーシテも争をやらねばならぬ、別に争を求めて營む譯にもあらざれども平和を破ぶる所の敵が世の中に澤山あるによりて、争を止めて平和を維持せんと欲せば、平和の敵と充分に戦ふの覺悟と勇氣とを持つて居らねばならぬ、人世は到底争ひ

を以て成りて居る。(第四十五則)

▲日本人の足の短かいは大變見苦しい、西洋人のスラリとした容態と比較すれば遙かに見劣りがする、是れは幼少の時より壘の上座はりて、兩足の發育を妨げた結果ならん、獨り足のみではなく、全身の態度に大なる悪影響を残して居る、將來外國人と競争の舞臺に立たんと欲せば、先づ座居の習慣を改めて、椅子と卓とを使用する習慣を養はねばならぬ、現今の男女學生は學校にて椅子に腰掛くる様になりてより、體格が大變立派に成つた、殊に女學生の強健にして快活なることは、到底昔風の婦人と比較にはならぬ、此事實は最も明かなる證據である。

(第四十六則)

▲而かし此を實行するには家屋と衣服とを多少改良せねばならぬ、先づ家屋は全然洋風其儘を模擬するにも及ばぬ、西洋の家屋は北部歐羅



巴の如き濕氣の多い地方より發達し來りたと云ふことなれば、日本の如き良氣候の國に於て簡様な陰氣なものを作るには及ばぬ快裕にして空氣の流通のよいのは日本の家屋の長所である。今少くも天井鴨居、床の間杯を高くし、床板を丈夫になし、間取りも大きくして、椅子や食卓を充分に並ぶることの出来る様にしたならば宜からふ。便所も座敷の側に直ぐ連なりて見え易いのは少くも蠻風である。出入が能く見えたり、臭氣が座敷へ通りたりする、是は廊下傳にしたならばよい。(第四十七則)

▲服装は男女共一般に筒袖に袴を穿つたらば善からふ。歩行の際に裾の合せ目より足の見ゆる様ではいけぬ。殊に婦人が高價な帯の堅いもので腰をしめるのが非常に悪い。袴を色彩の流派なる織物にて仕立て用いたらば、遙かに優美で高尚である。婦人の外出にも必ず帽子を戴くがよい。笄や櫛を買ふ金あらばドンナ流派な帽子でも買へる。當世流

行の束髪を何とか少しく改良して帽子を戴く様にしたならば、一層の美觀を添ゆるであらふ。下駄も亦た安い様で大變不經濟である。且つ運動も不活潑になる。是は是非とも皮靴にせねばならぬ。(第四十八則)

▲人間は何等かの確信を以て立て居らねばならぬ。如何に學問があつても才氣がありても、確信のなき人は輕薄でいけない。(第四十九則)

▲學者の通弊は、偏狹で、尊大で冷頭である。(第五十則)

▲青年の間はゴム球の様な心持に成りて居るのがよいと誰れかが言つた。是れは確かに名言である。(第五十一則)

▲人の位地を羨む勿れ、人の事業を羨む勿れ、人の名譽財産を羨む勿れ、人は唯だ自己の天職を眞摯に實行するのが何より貴い。(第五十二則)

▲宗教家は自己の宗旨を弘めんと希ふ勿れ、唯だ自己の信仰を以て人を救はんと思はゞ充分なり、以上兩者は似而非なるものなり、自己の宗

旨を弘めんとのみ思ふ人は、自己内心に於ける信仰を深く修養せんと  
 の念慮もなく、人の不幸に同情を寄する心もなくして、ひたすらに宗教  
 家と云ふ美名を利用して、自己の社會的勢力を作らんと、野心より出  
 づ、斯の如きは一種の政略に等し、衆生濟度の大任を負へるものとは云  
 ひ難し、其の宗旨の弘まると弘まらざるとは念頭に置くの必要なし、縁  
 に應じて人を濟度せんとの熱情を藏することそ望ましけれ、(第五三則)

▲予未だ西洋の地を踏まず、一代に一度は是非とも歐米の文華を一覽  
 して來たいと思ふ、西洋人に接して見ると自から胸宇が開豁になりて、  
 生々する様な氣持がする、彼等は社交の術にも長して居が「エネルギー」  
 が仲々強い、日本には無用な所に虚偽的の遠慮を用ひたり、御追従を振  
 り播いたりするが、人と談話して彼我の情交を温め、快樂を増すと云ふ  
 術が甚だ拙劣の様に感せらる、(第五十四則)

▲庭園にゴテゴテと無秩序に種々の花卉のあるよりも、老楓古松の間  
 に怪石の横はりて居るのが餘程高尚なり、又た雨後の竹窓に月影の差  
 しかゝる趣は、口にも筆にも盡すことが出來ぬ、西洋式の庭園よりも東  
 洋式の庭園が遙かに趣味があると予は考ふ、去りながら多くの人の八  
 釜敷云ふ所の築山泉水杯は、餘り人工が過ぎて却て箱庭の大なる様で  
 面白くない、成る丈け天然に近い様に人工を施さなくては却て風流に  
 ならぬ、(第五十五則)

▲早朝樹間に逍遙して新鮮の空氣を呼吸するに、身心共に爽然たるを  
 覺ゆ、晩景浴後の心緒更に妙趣の盡さざるあり、吾人は斯くの如くして  
 成るべく精神を開豁に保たざるべからず、精神開豁ならざれば物に凝  
 滞して、活潑々地の行動を取ること能はざるなり、(第五十六則)

▲大人とても稚氣は離れ難きものなり、身心共に脱落して枯木死灰の

如くあらんよりも寧ろ稚氣満々として活躍せるを宜しとなす眞面目にして而かも磊落ならんには是非とも稚氣の存する必要あり人間は歲月の積もるに随て眞面目さを増すものなるが是と同時に稚氣の減退せんと欲する傾向あり若し眞面目さのみ増長して稚氣無くなる時は誠に鹿爪らしくのみありて何等の興味を他人に感せしむること能ざるに至る老人が青年に嫌はるゝ所以多くは爰に在り。(第五十七則)

▲去れば老人は勉めて青年に交際を求め青年の言ふ所を聞き青年の思想を體得して自己の精神に資すること大切なり若し之に反して青年を蔑視して獨り自から高ふらんと欲せば却て青年の爲に排斥せられて自己の立脚地を失ふに至ることあるべし。|| 學者政治家實業家等の老後に至りて世に忘らるゝは以上の心掛の足らざるに原因すると思ふ。(第五十八則)

▲思想の嶄新にして改良進歩しつゝあるは青年の特色なり老人は腦漿凝結せるが如くにて時事に順應するの道にうとし然れとも幾十年の経験には侮どるべからざる所あり。|| 去れば理想は青年より取り、實行は老人を推すとせば大過なかるべし大臣は老人にして青年を擧げて参事官若くは秘書官たらしむること大に理由あり。(第五十九則)

▲革命は中年以下の人によりて營まるべし血氣旺盛にして神經稍過敏なる時ならでは驚天動地の大革命は成す能はず。|| 我國佛教青年諸子大に奮起せよ。(第六十則)

▲基督教の創世記はモーゼスがイスライルの古傳説に「エジプトの古傳説を加味して編纂せしものなるべし彼れは幼時小舟に流がされしが幸に「エジプト王に助けられ「エジプト」の教育を受けしなり去れば土地にて人類は作られたりと云ふ埃及の古傳説を取りて天啓なりと傲

稱して巧みに當時の愚民を籠絡せしこと明かなるものに似たり文明を以て自尊せる西洋人にして尙且つ斯かる愚説を奉ずるものゝ多きは片腹痛き次第なり。(第六十一則)

▲甘き物を愛する人は曰く此の食物は甘きが故に結好なりと而して甘きを好まざる人は曰く此の食物は甘きが故に宜しからずと同一の理由を以て一は善しと云ひ一は悪しと云ふ人は己れの欲する所に随て如何様とも理屈を利用するものなり。(第六十二則)

▲大改革をなさんと欲せば舊來の用語服裝建築裝飾儀式等に至るまで總して一掃するを要す幾百年來弊害を蓄積せるものを其儘踏襲して改善を施さんと欲するは恰かも藁駝師が朽木に愛着して遂に根本までをも枯死せしむるに至ると同一なり大英斷を下さずんば改革は起らざるなり。(第六十三則)

▲都會には都會の樂あり田舎には田舎の樂あり人々各自に安住する所に隨て樂まば何の處か樂土ならざらん田舎の人は頻りに都會の生活を羨望し都會の人は稍もすれば田舎の生活を蔑視せんとす謬見の甚しきものと云ふべし。(第六十四則)

▲都會は人工の樂を以て富み田舎は自然の樂を以て富む先づ東京に就て考ふるに電車電燈電話水道瓦斯等日常生活の要具は悉く文明の利器を以て給せらる出づれば則ち公園あり博物館あり動物園あり植物園あり勸工場あり水族館あり能樂演劇相撲寄席など人心を喜ばしむるものは隨處に在り加ふるに諸流の妙手を求むれば必ず得ざることなし。(第六十五則)

▲然れども斯の如き娛樂は金錢なければ得ること能はず金錢にて買ひ得て始めて自己の娛樂となる去れば富者は如何なる愉快をも窮む

ることを得れども、極貧のものは何れの幸福をも享受すること能はず。

(第六十六則)

▲之に反して田園の樂は自然に在り、老楓古柳邸宅を繞ぐり、鶯語蟬聲花鳥雪月何れも適せざることなし、里村を出づれば一望の青田碧波を濺はし、遠山の雲煙夕陽を罩め、牧童犢を驅りて板橋を踏むの光景宛然一幅の畫山水なり、自然の妙趣言句を絶せり而して斯かる自然の妙樂を得るには、貧富貴賤男女老少を擇ばざるなり、加ふるに野翁村童は概ね質朴敦厚にして名利の念に乏しく、人と苦樂を分つことを識り、一村を擧げて一家族の如き觀をなせり。(第六十七則)

▲去れば名利狂奔の巷に奮闘せんと欲するものは都會に住べく、悠悠々自適自然を樂まんと欲するものは山村の間に住すべし。(第六十八則)

▲然れども書卷を友とするものは、人馬喧騒の地にのみ一生を經過す

るは甚た面白からず、夏期休業を利用して山澤の間に放浪し、自然の空氣を呼吸し、天地の靈光に接して精神に資する所なかるべからず。

(第六十九則)

▲學ぶ時には大に學ぶべく、遊ぶ時には大に遊ぶべし、學ばざるにもあらず、遊ばざるにもあらず、忙々として光陰を消磨することは人心を毒すること大なり、疎懶は人間の敵なり。(第七十則)

▲慢心の生じたる時は、己れよりも勝れたる人を想見すべし、不平の生じたる時は、己れよりも不幸なる人を想見すべし、慢心不平共に他と比較することによりて慰籍せらる。(第七十一則)

▲鎌倉圓覺寺の祖元和尙元兵の爲めに斬られんとせし時、從容として「乾坤無地、卓孤筇、喜得人空、亦法空、珍重大元三尺劍、電光影裏、斬春風」と云ふ偈を作りて敵を退かしめしと云ふ丈夫正さに斯の如き度量なかる

26/8/40

べからず。(第七十二則)

▲「パウロ」曰く、愛は堪え忍び且つ情あり、愛は妬まず、愛は誇らず、慢らず、正しからざることを行はず、己れの益を圖らず、軽々しく怒らず、人に悪しきを負はせず、不義を喜ばず、眞實を喜び、すべての事を寛かにし、すべての事を信じ、すべての事を望み、すべての事を忍ぶなり云々と、能く愛の意義を謂ひ盡せり、愛は天地の至誠なり。(第七十三則)

▲名利は誰しも欲する所なれども得るまでが花なり、既に得終れば更に妙處なきが如し。(第七十四則)

明治四十年二月二十五日印刷  
明治四十年二月二十八日發行

〔定価金參拾五錢〕

著作者 北村 教 殿  
文學士 本所區綠町三番地

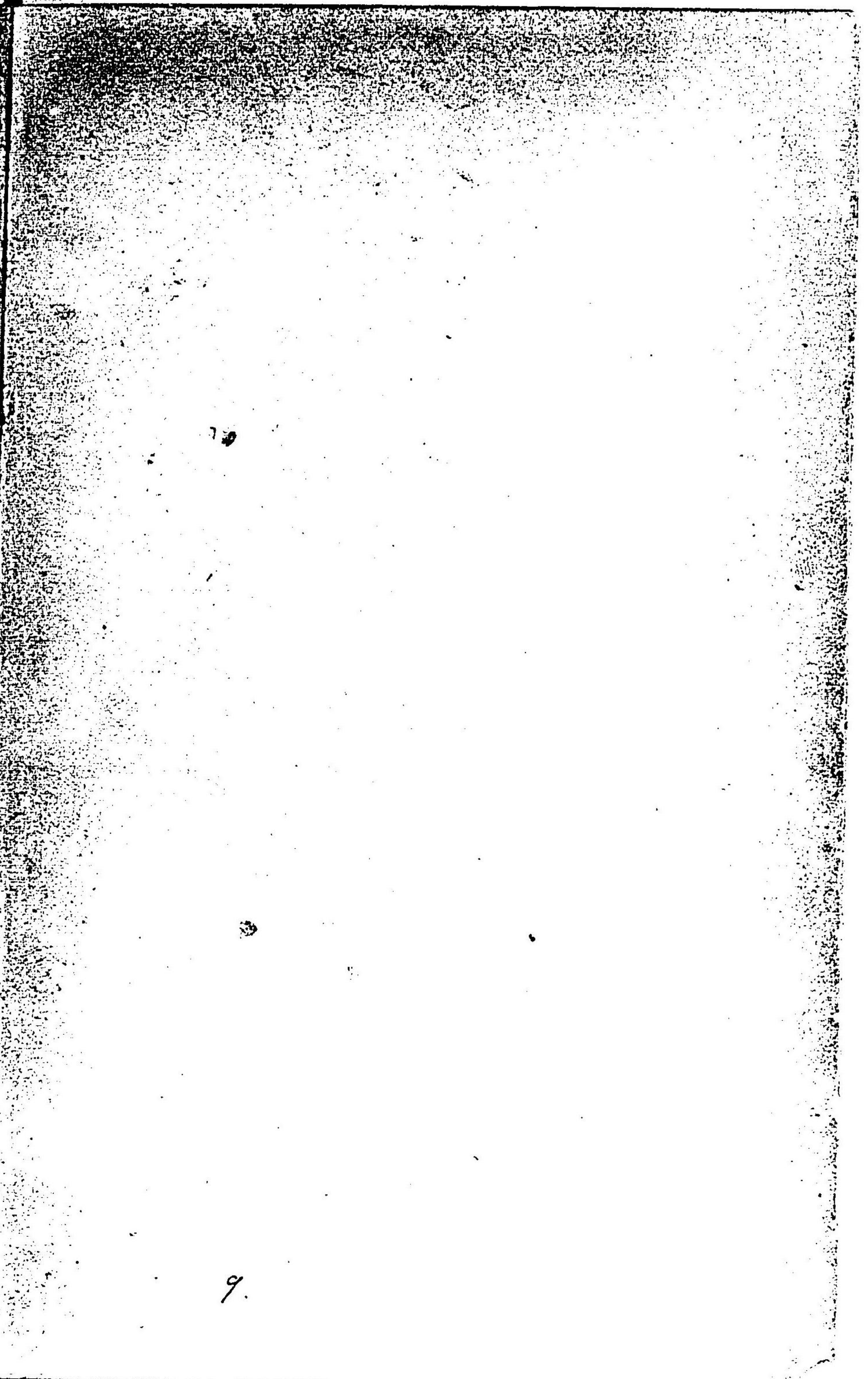
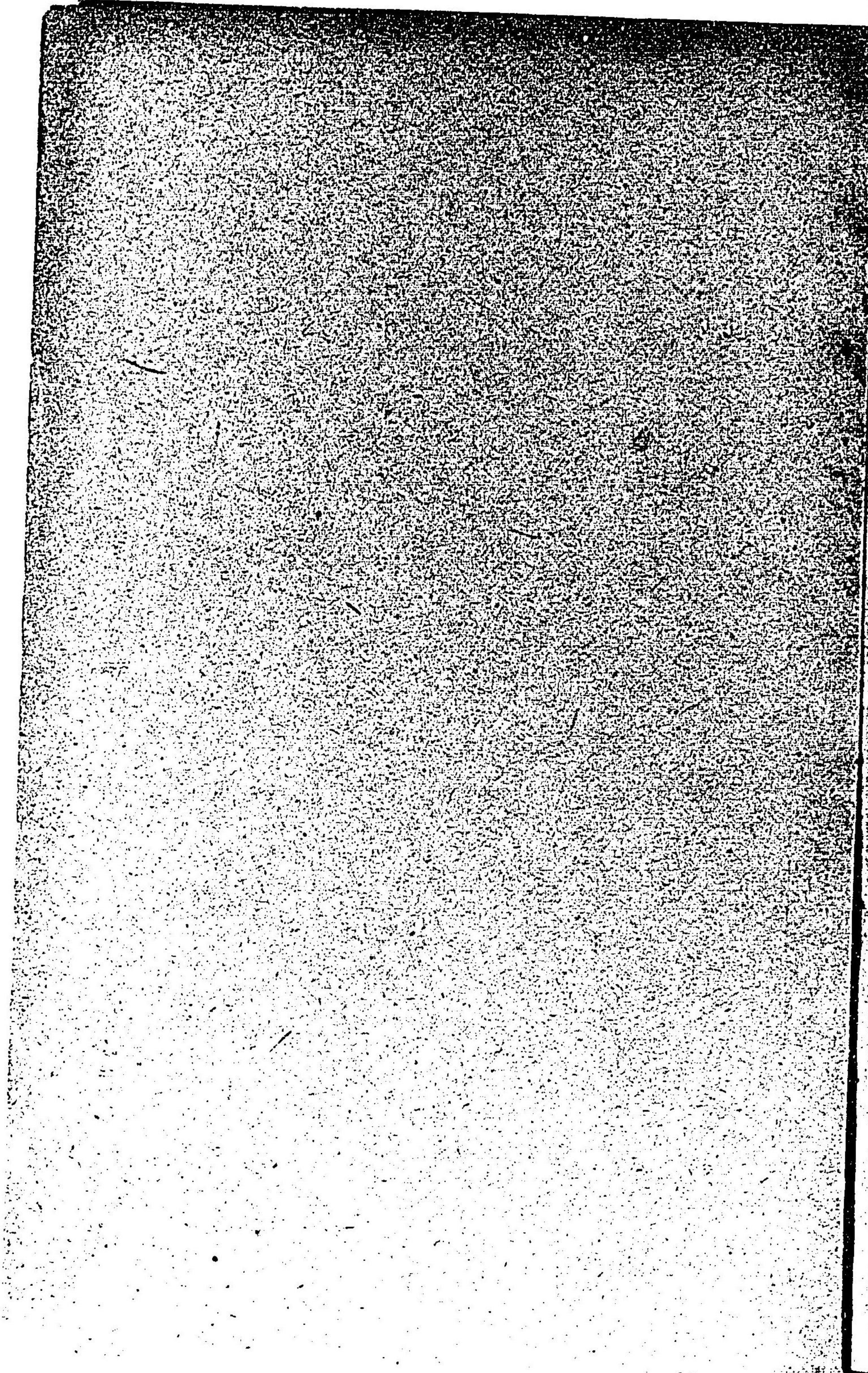
發行者 青野友三郎  
日本橋區通四丁目七番地

印刷者 三原松外吉  
京橋區本港町十三番地

印刷所 三原松印刷所  
京橋區本港町十三番地

發兌所 文魁堂書店  
日本橋區通四丁目

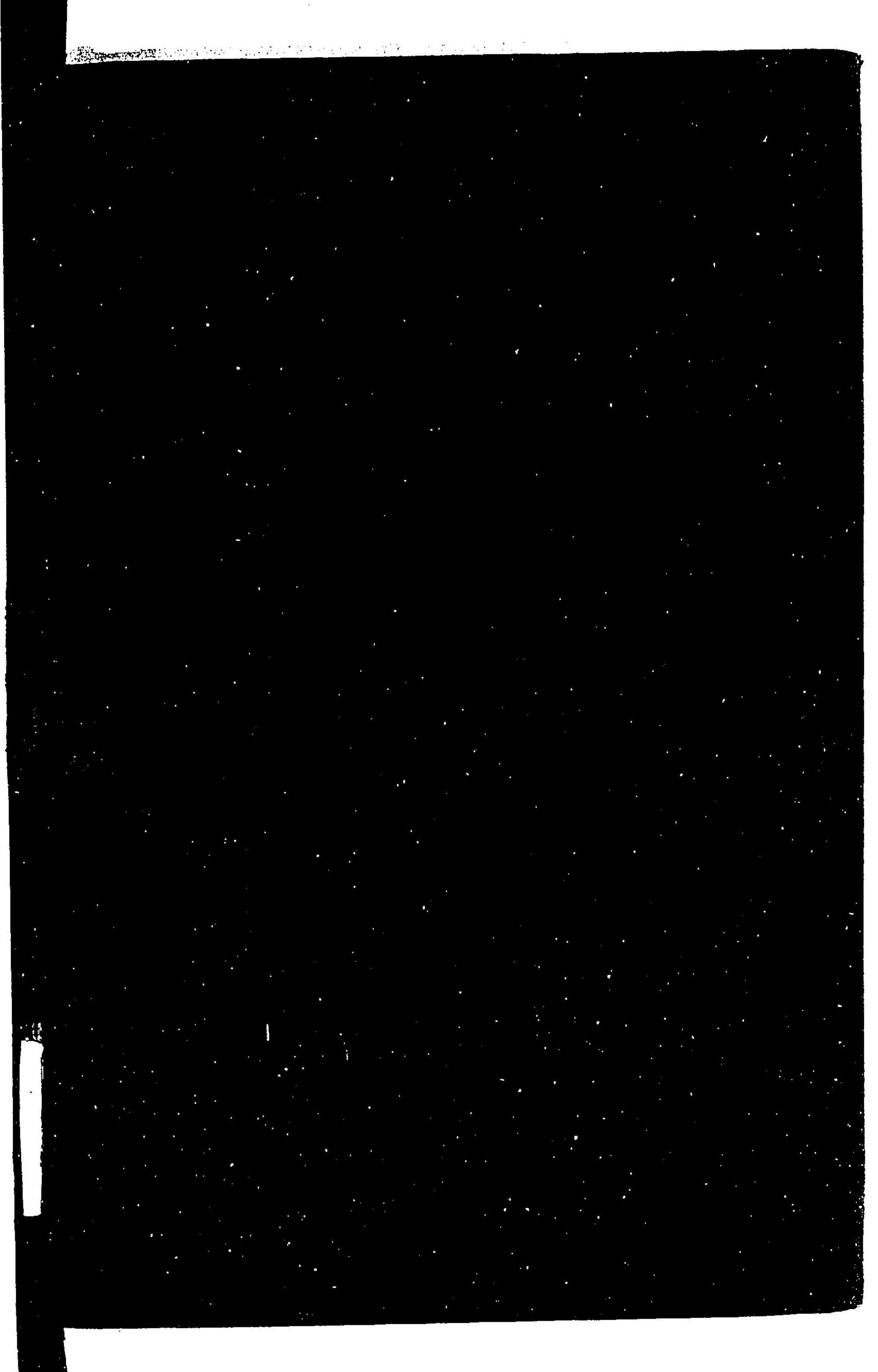
電話本局三千百五十八番



9.

325
13





013687-000-3

325-13

生死問題

北村 教巖 / 著

M40

ABA-0158



